ＩＳ　織斑家の弟

黒曜

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様の手違いにより死んでしまった少年が織斑家の末の弟として転生してしまう話です。

もとはにじファンにて投稿していたものですが、閉鎖ということなのでこちらで投稿しはじめます。

目次

プロローグ ―― 1
第一話 ―― 2
第二話 ―― 6
第三話 ―― 13
第四話 ―― 18
第五話 ―― 27
第六話 ―― 34
第七話 ―― 41
第八話 ―― 46
第九話 ―― 58
第十話 ―― 66
第十一話 ―― 71

プロローグ

僕は、死んでしまったらしくそれは神様の手違いだったからと言う訳でもう一度新しい生を与えると言われそれに伴って何か特別な能力をくれるらしいけどそれに対して僕は何もいらないと答えたがそれでは申し訳無さすぎると言い換えされてしまったのでそれならと瞬間記憶能力を頼んだ。でもそれ以外にも何かないかと言われたが特に思いつきもしなかったので、そういえば僕は、どんな所に転生するのか教えてもらっていなかったのでその事を聞いてみたが〝ＩＳ　インフィニットストラト〟の世界と言われたがまったく分からなかったので簡単にどんな場所なのかを聞きそれならばと思い

ＩＳが僕にも使えるようにと僕でもそのＩＳのコアを作ることができるようにと後は、瞬間記憶能力と一度見たものを忘れないようにしてほしいと頼み。許可がでた。

そして、そのまま僕の意識は途切れていった。

第一話

僕が、この世界に転生してから数年が経った。僕のこの世界での家族は、織斑千冬と織斑一夏の二人のお兄ちゃんとお姉ちゃんだけだ。
何でお父さんとお母さんはいないのかと前に聞いてみたがぜんぜん教えてくれなかった。それでも姉さんと兄さんがいれば僕はいいと思っていた。

それでも、最近は姉さんは家に帰ってこない日が多くなった。実質僕と兄さんを今養っているのは、姉さんだ。
そのせいで姉さんは仕事が忙しいのだと僕は思った。でもどんな仕事をしてるのかと前に聞いたが教えてくれずに

「命が気にする必要ないぞ」

とだけ言われてしまった。
普通ならそんなこと子供が知らなくても大丈夫だといった感じなのかもしれないがこのときの姉さんの雰囲気は自分に関わらせないようにといった雰囲気だった。
僕は、まるで遠ざけられているような気がしてしまいただ。

「・・・わかった」

っとだけ言い姉さんが家に帰ったときに返事をした。
それからは、姉さんに嫌われたくない思いでいい子になろうとがんばった。勉強もがんばったし家事も一夏兄さんに教わりながら覚えたり少し前までいた。
一夏兄さんと同級生の凰　鈴音の鈴お姉さんにも少しだけ教わった、ただただ姉さんに褒めてもらいたいと思った。

たまに家に帰ってくるお姉ちゃんに言うが全然褒めてもらえなかったといよりは全然聞いていないかのような状態だった。
それは、僕がまだいい子じゃないから褒めてもらえないと思い。さらにがんばった。あるときそんな僕のこと見かねたお兄ちゃんが
「なぁ命?何でそんなに無理ばかりするんだ。そんな無理ばかりすればお前が倒れちまうぞ」
僕のことを気遣ってそう言われたので僕は、何でがんばるかの理由を言ったら僕のことを思いっきり抱きしめて
「ごめんな・・・気づいてやれなくて。本当にごめんなお前に無理ばかりさせて。お前は、いい子だからもう無理をしなくてもいいんだ」
顔は見えなかったが声が震えていた。まるで泣きそうな声でただ泣かぬように今まで無理をしていい子になろうとがんばった自分の弟の頭をなでながら謝った。
「お兄ちゃんどうしたの?」
「何でもないからな・・・今度ちゃんと千冬姉には俺から言っておいてやるから」
そう言った時自分のまだ幼い弟は、本当に嬉しそうな顔をした。その顔は今まで見たことなかったそして、自分がいままでどれだけ弟のことを見ていなかったのかを思い知った。
それから少ししてからも命は、手伝いをやめなかったが前ほど無茶はしなかった。
でも、ある時一夏が命におつかいを頼んだ。
その帰り道命は、事故にあった。

それを聞いて一夏は、すぐに運ばれた病院に行くとそこには、痛々しい姿の命の姿があった。
包帯で巻かれ点滴の針を刺されているその姿を見て力をなくしその場に座りこんでしまった。

その後なぜ事故にあったのかの理由を聞くと通行人を姉と勘違いし道路に飛び込んでしまい轢かれたと聞かされた。
そのことを言い終わった医師は、一夏に対して

「こんな時に失礼だが君のお姉さんは何をしているんだい？あの子がこんな状態なのに」

「・・・すみません。俺も姉さんが何をしてるのかはわからないんです」

自身も前に何度何をしているのかを聞いたことがあるが絶対に教えてくれなかった。
あの時は、なんとも思わなかったが今は怒りを感じた。命がこんなことになってるのに何で来てくれないんだ？どうして連絡してもでてくれないんだ・・・。
一夏は、今まで自分の誇りでもあり自慢の姉に始めて怒りを覚えた。世間では〝ブリュンヒルデ〟といわれている姉に対して初めてそう思った。

「それで命は、助かるんですか!?」

「命は、取り留めたが・・・・　右目は駄目でしょう」

そう医師に言われると絶望したような表情に一夏はなった。

「ど、どうしてですか!!」

「事故の時の破片が右目に刺さってしまったので・・・・どうすることもできません」

医師の言葉は、一夏にグッサリと突き刺さってしまい医師もこれ以上今の一夏に言えることはないと思ったのかとりあえずは明日またお話ししますと言い保護者の方を呼んでおくださいと言われたがその言葉も今の一夏には届いていないようで放心状態になったままだ。

なぜ自分の弟がこんな目にあわなければいけないんだ?なぜあんなにいい子になろうとがんばっていた命がこんな目にと考えを巡らせたが何もいい答えは出ずに今自分の目の前にいる痛々しい状態の命を見てどうにかしてやらないとだけを思った。

どうせでてくれないと思ったが一夏は、千冬の携帯に連絡するが電源がはいってないようで通じなかった。せめて仕事場の連絡先だけでも教えてくれればつなげたのにと悔やんでいた。

第二話

僕は気がついたときは白い天井で消毒液の独特なにおいがする病室だった。僕は、はじめなんでここにいるのかと考えたが次第に思い出してきた。

僕は、事故にあってここに運ばれたんだ。お姉ちゃんと見間違えて飛び出して轢かれるなんて僕は何をしてるんだろうか。

そんなことより僕の視界がなんだか違和感があった。僕が自身の目を触ろうとしたとき病室のドアが開き看護婦さんが僕が起きているのを確認するとすぐに医師を呼んだ。

「どこか痛いところはあるかい？」

僕のことを治療してくれた外国人のお爺さんの医師がくるとまず僕にそう聞いてきた。

「・・・いえ。特に痛みはないですけど目に違和感があります」

そこで医師は少し考え込んだようだが先ほどよりも真剣な表情になり

「よく聞いてくれるかな。君の右目は事故で見えなくなってしまったんだ」

「・・・そうですか」

僕は、ただそう言うだけしかできなかった。自分の右目がなくなってしまった事にはあまり関心がないかのように言うがそれよりも

「すみません。僕のお姉ちゃんは来てくれましたか？」

僕は、そのことが一番気になった。

「・・・・いや。君のお姉さんはまだ来ていないがお兄さんは来ていたよ。お兄さんが何度かお姉さんに連絡をとろうとしたんだが連絡がつかなかったらしい」

やっぱりお姉ちゃんは来てくれなかったんだ。

「それで、こんな時にこんな事を聞くのも何だが・・・・君達のご両親はいないことも聞かせてもらったが今の君達の保護者は君のお姉さんでいいのかな?」

今の僕の保護者?そんなのもうわからない今回のことで僕は、捨てられたっと思ってしまった。

いや、前々からそう思っていた。いつもお姉ちゃんは、一夏お兄ちゃんの事しかみてなかった。

僕のことなんか目にもくれないようにだから

「・・・・僕には、保護者はいないです」

そう言ってしまった。

「そうか・・・・・。もし君がよければだが私の養子ならないか?」

そのお爺さんがそう言うと僕は、ただ頭を縦に振りうなずいた。

「なら。後は、私たちでいろいろと手続きなどをしておくから今はゆっくりと治すといい」

「・・・・わかりました」

僕がそう返事をするとお爺さんは、優しそうな笑みを浮かべ病室を出て行き僕は看護婦さんに包帯を取り替えてもらった。

それからしばらくして一夏お兄ちゃんとお爺ちゃんがいろいろと話をして僕は正式に養子というよりは、一時的にこちらで預かる事ということになった。

その際の話し合いの場にもお姉ちゃんはこなかったらしい。

さらに少したち僕とお爺さんは、アメリカに行くことになったというよりはお爺さんがアメリカに帰るので僕も一緒に行くことになっただけだ。

その際の見送りに一夏お兄ちゃんとその友達の弾さんが来てくれて

「いつでも戻ってくればいいからな?」っと笑いながら言っていたがどこか泣くのを耐えているような感じがしたが僕は、ただ

「バイバイ」

っとだけ言った。その後は、飛行機に乗るために移動したが後ろから泣き声が聞こえた気がしたが僕は決して後ろを振り向くことはなく歩いた。

僕がアメリカに来てから目がぐるしく僕の生活は一変した。

まず学校に入学するために試験をすることになったが何をお爺さ

んは思ったのか試験問題がどう見ても小学生クラスの問題ではなく大学レベルの問題がだされたがそれを黙々と解いたらとても驚いた。
どうやら冗談半分でだしたらしいが解かれるとは思わなかったらしい。
それからというもの僕は大学に通ったが好奇な目線もあったが敵視する視線も多くそんなことに耐えたくもなかったのでお爺さんを通じ学長に無理やり卒業用の論文を出した。
その内容はＩＳについての物でそれが評価され通わなくても卒業したことにすることになった。

お爺さんがここに多くの援助してくれていたおかげでだいぶ助かった。それから少しし軍のえらい人たちが家を訪ねてきた。

「フランク、久しぶりだな」

「そうだなセグンド。ところでお前が家になんのようだ？ただ昔話をしにきたというわけではないのだろう」

「あぁ・・・単刀直入に言うがお前の息子を軍で働かせてみないか？」

そこでお爺さん（フランク）がそのことに対して反応をしめした。

「なぜかな？一応はこの子は私の息子というよりは預かっているだけだ」

「そうだな。その子のだした論文を読ませてもらって今のうちからこちらの事を少しでも理解してもらいたいということだがそれでは駄目か？」

「ふむ・・・・。とにかく私はこのことに対してはどうこう言うことは

できない。最終的にはこの子が全部決めることだ」

そう言うと二人は僕のほうを真剣な表情で見てくると

「ミコト君は、どうしたいかな？」

「別に断ってくれてもかまわないよ」

僕は、さっきから考えていたこれから僕はどうしていくべきかを・・・そして僕が決めた答えは

「僕は、そのお話を受けます「おぉ！受けてくれるか」ですがいくつか条件をつけさせてください」

「なんだい？何でも言ってくれ」

少し興奮したような状態になったセグントさん。

「まず一つに僕にアメリカ国籍をください「それは何とかなるな」もう一つは、僕に将軍の地位をください」

「「!!??」」

そう言うとさすがの二人は驚いたような顔をしたといよりは驚いている

「それは無理があｒ「もしもそれをすべて承諾してくださるのでしたら僕はコアを作ってみせます」・・それは本気で言っているのか？」

先ほどの優しかった口調というよりは本来の軍人としての口調に

なった。

「もちろんです。もしもできなければ好きに扱ってかまいません」

「わかった」

そう言うと携帯をだしどこかに連絡をとっている。お爺さんのほうをみるとすごい笑っている。はて？僕は何かおかしいことをしたのだろうか？

「すまないが今日はこれで失礼するよ。これから会議をすることになったそれとミコトくんやはり君はそこのフランクの息子だなそこの馬鹿と同じようにとんでもない事をいきなり言い出すところはそっくりだよ」

そう言うとセグントおじさん？は外に止めていた車に乗ると急いでいってしまったが制限速度は守ったほうがいいと思うよ？っとお爺さんに言うとさらに笑っている。

「それよりお爺さん？あのセグントおじさんってそんなに偉い人なの？」

「あぁ。あいつか？あいつはあれでも将軍だぞ？」

え？そうだったのですか。だからいきなり会議をするために招集することができたのか・

「お爺さんも昔は無茶したの？」

「ミコト若いうちはとにかく無茶なことしておけばいいんだよ。それにしてもミコトは私より無茶苦茶なことをするなぁ。昔の私でもも

う少しは控えてたがな」

そう言い昔の自分の武勇伝をいろいろと教えてくれたが貴方は本当に人間ですか？と聞きたいことが多々あった。

第三話

あれから数日してセグントおじさんから連絡があり戸籍のほうはすぐにでも用意するということが伝えられたが地位のほうは結果をしたらになった。

それは、至極当然だと思った。

それして、僕はセグントおじさんが用意してくれた研究所に連れていかれそこでコアとＩＳの製作にとりかかった。

従来のＩＳは、コストが掛かりすぎていると常々僕は思っていた。

ＩＳはスポーツと世間では言っているがあれは完璧に兵器だ。

そんなものに求められるのは低コストでそれなりの高性能であるべきだと思っている。

さらに現在のＩＳは欠陥機だとも考えているなぜかって？それはもちろん女性にしか扱うことができないからである。

なぜ篠ノ之博士は作ったんだ？天才といわれているあの人なら男性でも扱えるものを作れたはずだま、そんなこと考えてもしかたないですね。

僕は、僕の知っている知識のなかで低コストになりそうな機体を考え設計図を描いた。

一応本物のＩＳコアを見てみようと思いセグントおじさんに頼み見せてもらった時ＩＳが僕に反応して起動してしまった。

それを見るとおじさんはこのことはまだ秘密にしておこうと僕に言ってきた僕はそれを了承した。

そして、過去の第１回ＩＳ世界大会（モンド・グロッソ）の資料を見たとき総合優勝および格闘部門優勝者の所に自身の姉の名前を見つけてしまった。

その時の表情はとても冷えきったような目をしていたとそれを見ていた兵士は語った。

それからというものは何かにとりつかれたかのように一心不乱にＩＳの製作をした。それから1週間たちやっと完成した。
一応その現物をセグントおじさんに見せるとすぐに重要人物たちを集めるから説明してもらうということになった。
僕は、広い会議室に連れてこられるとすでにその場所にはこのアメリカで重要人物たちが集まっていた。

「急な私の呼びかけに応じてくださりありがとうございます。本日呼び出してしまったのは、先日話した物がついに完成したからだ」

そう言うとおぉと言った声が上がった。

「では、すぐその製作者に完成品の説明をしてもらおうか」

「わかりました、大統領。では、ミコト君説明を頼むよ」

そう言われ僕が前に出るとやはり驚かれたが大統領と言われた男の人は微動だにしなかった。さすがこの大国をまとめている人物だと思った。

「では、まずこの機体ですが僕が一番注目したのは従来のＩＳはコストが掛かりすぎていると思いました。そのためこの機体は、コストを抑えさらに機動力も現在配備されている第二世代より上です」

そう言うと今回1機を開発するために掛かった費用を提示しさらに現在配備されているＩＳの1回の整備に掛かる費用をだした。
それを見た政治家、軍人は驚きの声を上げた。コストパフォーマンスは十分なようですね。

「さらにこの機体はワンオフ・アビリティーは使用できませんが男性も使用可能になっております」

その言葉を聞いたこの会議室にいるセグントおじさんを除く全員が驚愕した。本来ＩＳは、女性のみしか扱うことができない。それなのに今回開発された機体は、男性も使用可能になったものだ。

「ふむ・・・。大体の事はわかったがこの機体はすぐにでも量産可能なのかい？」

「もちろんです。すぐにでも量産は、可能ですが大統領」

「何かね？言ってみなさい」

「量産は、するのは賛成なのですがしばらくはこの機体のことは極秘にしておくことがよろしいかと」

「なぜかね？」

「変なタイミングで発表すれば他国がこちらに技術開示を迫ってきます」

「確かにそのとおりだな。ならば君ならどうするのだ？」

「それでしたら。こちらのデータをご覧ください」

命がそう言うとどうやって調べたのかそこには現アメリカ軍の女性を中心とした部隊のいくつかが同時にクーデターを起こそうとし

ていることがわかった。
　現大統領は、女性だからといって優遇などをしない人物でその人物の能力で評価する人物だもちろん努力した者にもちゃんとした評価をくだす人物で国民にも人気があっる。
「ふむ・・・つまりこの者達がクーデターを起こしたときにこの機体を使って鎮圧するということでいいのだな？」
「はい。そうです。このクーデターに参加するであろう部隊の武装ははっきり言って1国落とすことが可能だと思います。だからこのときに迅速的に鎮圧すれば世界にもこの国の力を示すことができると思います」

　たしかにそのとおりだと軍人は納得し政治家達は、今後の利益を考えれば賛成した。大統領自身もこれには賛成した。
　そして、クーデターが起こるその時までにまずは圧倒的な数をそろえすぐに鎮圧しなければならないと考えていた。

「では、これをもって君を将軍としての地位を与えよう異論がある者はいるか？」
「ふむ誰もいないようだな。所でこの機体の名はなんというんだ？」
「この機体の名前は〝ラドウン〟と言う名にしております」
「〝ラドウン〟かギリシア神話に登場する黄金の林檎を守っていたドラゴン・ラードーンからとったということか」

「それともう一つだが戸籍のことだが名はそのままでいいのか？」

僕は、どうしようかと悩んだ時もあったがもう何も未練はない。

「なら僕は今から名を〝ボルキュス〟と名乗ります」

そう宣言すると会議室から拍手が起こった。

「わかったでは、すぐに動いてくれ〝ボルキュス〟将軍」

「はっ！」

この時僕は最初の1歩を踏み出せた気がした。これで無理にいい子を演じていた自分と別れることができた気がした。

第四話

ある日アメリカで大規模なクーデターが起こった。
クーデターを起こしたのは女性中心というよりは女性のみで構成されたＩＳが配備された部隊とそれを支持する陸、海軍の軍人達だ。
彼女たちはまずアラスカ基地を武力による占拠そして政府に対し何を考えたのか現大統領と男の政治家達の辞任を要求した。

現在のアメリカ政府の方針は実力主義だがその方針にＩＳの扱える女性達の大多数が不満を持っていた。
そしてついに我慢の限界がきたそれは、ついこの間報道されたニュースに原因があった。〝日本の男子学生がＩＳを起動した!!〟っといった報道がありもしかしたら自国でも男がＩＳを起動させ自分達の地位や立場が危うくなると思ったのだろう。

今まではＩＳに乗ることができるといった事で好き勝手やってきた者も多くいるがこの事件のおかげで対等になってしまういや、それどころか自分達が下になってしまうと感じたのだ。
現政府は、男性政治家が９割近く占めているためこのような要求を政府に突き付け女性につごうがいい国にしていこうとした。

だが、この要求にたいしアメリカ政府は
「彼女達は、すでに我が国の兵士ではなく。ただのテロリストとして認識する。そして、我が国はテロには決して屈指はしない!!!」

っと堂々と宣言した。その姿を見てさらに国民からの支持率がよくなったとかそれはさておき。
その反面この状況をどう鎮圧するのかの方法を聞きたいらしい記者達はどういった方法で聞こうかと考えてもいた。
今この事件は世界に対して報道されている。

「大統領。このクーデターはどういった方法で鎮圧されるおつもりなのでしょうか。クーデターを起こした部隊の戦力はＩＳが４５もありさらに巡洋艦３隻戦車も複数だと報じられていますが」

一人の記者がついに聞いた。政府は、彼女達の戦力をすべて公開しておりその事に最初はどこの国の記者も驚いていた。普通であればそんな情報は教えられもしないものだからである。

「その質問の答えだが至って簡単なことだ。テロリスト達は、すべて殲滅する」

そう大統領が宣言すると会見の会場は一瞬にしてしずかになりその中にいた女性記者達は笑いをこらえようとしたが何人かは笑い出した。そんな中各国の男性記者は、まじめな表情になった。

「だ、大統領それは本気でおっしゃってるのですか？ＩＳですよ？それも４５機もアメリカが保有しているＩＳのほとんどが敵になってるのですよ」

そう言った記者もやはり女に男が勝つ気？っと言った言い方だったがそんなことはお構いなしという態度で話を続ける

「ほう～。貴女は、我々が勝てないとおっしゃいたいのかな？」

「失礼ですがそのとおりです」

「では、これから起こることをしっかりと見ておくといい」

そう言うと急に今で後ろにあったモニターがつき映像が流れた。その映像は、現在占拠されているアラスカ基地が映し出された。それ

と同時に

「・・・・始めろ」

その声が聞こえたがそれはどいう意味なのか理解できなかったのか誰も質問をしなかった。

side　命

ところ変わって

「・・・・さてやっと大統領からの指示がきたな」

現在僕は、自身が作った。第二世代機ラドゥンを中心とした大隊を率いて鎮圧に向かっている。

「あぁ。久方ぶりの戦場の空気ですなアイレス殿」

「そうだな。バデス主席将軍補佐官殿・・・あぁベトナム戦争以来だ」

軍の縮小のせいで退役していたアイレスさんとバデスさんを僕は、何とか説得してもう一度軍に戻ってきてくれないかと頼んだ。どち

らかというと僕が説得というよりはセグントおじさんが説得したといっていいですが。僕がなぜこの人たちを呼び戻そうとしたのかというとそれは至極簡単なことで本当の戦争をしっている人だからでさらにセグントおじさんが一番押した人たちだからだ。

「将軍そろそろ敵を目視できる距離まできました」

真面目そうなといよりはクールな女性といったほうがいい現役軍人のイオ大佐だこの人は、こんな世界のなかでもちゃんと周りを見ることができ優秀な人物だったため大佐の部隊ごとスカウトした。

「でも、本当に馬鹿ですよねボルキュス将軍～」

「ニケあまりはしゃぎすぎない」

「もぉ～レトは真面目すぎるよ」

「ニケ少しはレトをみならいなさい」

「大佐までそんなこと言うんですか～」

ニケとレトは、イオ大佐の部隊にもともといた隊員達だ。

「お喋りは、ここまでにしておこう」

「「「「はっ!!」」」」

僕の一声で一斉に気を引き締めた声をだし返答をする。

そして、僕が今率いている部隊をみた。

現在僕が率いている大隊数はラドウンだけですでに８４機だ。

さらに僕の専用機の第三世代のヒュケリオン、ベルセボネこれはバ

デスの専用機でドラギアがアイレスの専用機。

さしてニケにはギラトスこれはまだ第二世代だ。
レトにはエルテーミスを渡したエルテーミスは、時間ぎりぎりにロールアウトしたばかりの機体のため今回はテストもかねている。
そのエルテーミスのパーツを使ってカスタムしたトロイアがイオ大佐の機体だがこの機体のカスタムはイオ大佐自身が行ったため僕ができたのは武器の製造だけだ。

「では、バデス久しぶりの戦場なのです。号令は任せた」

「はっ！ありがとうございます」

そう言うとバデスは笑みを浮かべ全軍に対して

「ではみなさん野獣になりましょう!!」

その一声で全軍が行動を開始した。
まず散会して3方向から攻めることになった。右翼がイオ大佐が率いる３３機左翼がバデス、アイレス３３機率いて攻めるそして中央が僕で１９機。
テロリストは、急に現れたアメリカ軍にあわてたなぜ自国にあれほどのＩＳがあるのかだがその機体はどれもみたことがないものだったためさらに混乱したがいち早くその場で指示をだして迎撃に出る。

「ふっん!!この程度ですか？」

「なぜ男がＩＳを使えると!!」

「そんな些細なことはどうでもいでしょう・・・・それより貴女達の実力はこの程度なのですかそうだったなら残念ですがここで死んでも

らいましょう」

眼前にいる老兵が変なことを言ったことで不思議になった元アメリカのＩＳパイロット。

ＩＳには絶対防御があり死んだりすることはないはずだと思い目の前に全身装甲のＩＳを使っている老兵を馬鹿にしたような目で見ると眼前の機体が槍を突き出してきたのでそれを防御した。そして・・・・絶対防御を貫通して分厚い装甲に槍が刺さった。

「へ？何で刺さるの!?こんなのって聞いて・・・」

「さすが将軍からいただいた機体だ。お嬢さん一応教えておいてあげるとこの槍・・・いやここにいる部隊の近接武装すべてに〝ブリュンヒルデ〟だったかな？その者が使っていた〝雪片〟の特性であるシールド無効機能がついているそうだ。ま、これも弾数せいで１０回が限界らしいみたいですが十分でしょう」

そういい終える老兵を怯えた表情で女性は見たそして

「た、たすけ」

「それでは、サヨウナラお嬢さん・・・・」

そう言いバデスは、自身の主力武器である槍についている内臓型マシンガンを撃ち貫いた女性に止めをさして。

それを見た味方の士気は、上がり対してテロリストと呼ばれた女性達は恐怖で顔を染めた。

そして、さらにまた一人また一人とアイレスに今まで虐げていた男達にやられていくその光景はバデスが言ったとおり野獣のように喰らいついた。その中でも何人かは投降したらしい

そして、それはイオ大佐が率いる右翼でもにたような状態だった。
まずイオ大佐は、命が作った十字剣・クロスサイフォスを使い次々に落としていくそのイオを援護するようにレトがスナイパーライフルで援護する。
ニケは、敵を捕まえ両腕で相手を押しつぶそうとしているこの攻撃によりろっ骨はすぐに折られすぐに降伏した。

何とかしてこの戦場から逃げようとした者は、一番手薄であろう中央に集まった。
そこに集まったＩＳは全部で４機だ。
戦闘が始まってまだ３０分もたっていないなのにもうすでに戦車は全滅し巡洋艦はイオ大佐達により完全に大破した。
そのためもうここに残っている４機しかない。
女性達はこんなことになるなんて信じられないという顔をしながら中央の部隊つまりこの部隊の指揮官を倒してこの場から撤退しようとした。

彼女達が中央にいる黒くマントとフードを羽織っている不気味な機体に対して突撃を仕掛けるが左翼と右翼の部隊は自分達の指揮官を守ろうとせずにただ見ているだけだった。
さらに護衛にのこっているはずの１８機の機体は下がりヒュケーリオンのみがその場に残った。

女性達が近接武装に切り替え切りかかると

「・・・・つまらないな」

命は、ただそうつぶやき自身の剣を２本抜き眼前に迫っていたナイフを両肩に装備した多関節武器「スコルピオンテール」を使い受け止め剣で貫いた。そして続いて振り下ろされたナイフもまたもう一本で受け止め切った。残りの２人は、二人の姿をみると震え始めたため

「まだ・・続けますか?」

僕がそう聞くとすごい勢いで首を横に振り投降した。これでもってこのクーデターは鎮圧された。

ｓｉｄｅｏｕｔ命

「さて・・・これでクーデターは終わりましたな。何か質問はあるかな?」

大統領は、記者達に質問があるかきくが誰も反応をおこそうとしない確かに今時分たちの目だ見たことが本当のことなのかわからないだろう。だが、これが事実でありアメリカの力だ。

「では、後日また会見を開くのでそのときにでもまた質問されるように」

そう言い大統領は、退席した。その後は、いろいろと忙しくあの機体の説明などを求められたがこれをかたくなに拒否した。

さらにＩＳ委員会からもいろいろと交渉されたらしく僕は、あれから少ししてから大統領に呼び出された。

「失礼します」

「わざわざすまないね。ボルキュス将軍」

「いえ」

「急ですまないが君には今度から日本のＩＳ学園に行ってもらうことになった」

「なぜ私が行くことになったのでしょうか？」

「あぁ・・ＩＳ委員会の連中がしつこくてなそれで君にアメリカの代表候補生としていってもらいたいのだが大丈夫か？」

「わかりました。では、いつごろ向かえばいいのでしょうか？」

「１週間後に向かってくれ。ま、君はもう大学を出たことになっているし休暇とでも思ってゆっくりとしてくれたまえそれにこの間報道された君の兄である織村　一夏も通うようだ」

「そうですか。ま、それは普通でしょうね。では、失礼します」

「一応こちらからも何人か君の護衛を送り込む予定だ」

そう言うと僕は、部屋を後にした。

第五話

現在僕は、日本のＩＳ学園に向かう途中の飛行機の中だ。少し前に護衛としてイオ大佐がＩＳ学園の教師としてさきに向かった。そして、今はニケとレトの二人が今現在の護衛だ。ちなみにＩＳ学園に対しては誰が向かうかはまったく教えていない（大統領が）何でもそのほうがいい宣伝になるらしいが何の宣伝なのだろう。

「それにしてもまさか将軍自らＩＳ学園に行かれることになるとは予想外でした」

「そうですよ～。将軍って確かもう大学卒業してましたよね？」

「えぇ。私はすでに大学をでているよ。まぁ、大統領からの指示だ。断るわけにもいかないな」

「ですが将軍ＩＳ学園で使用される機体は、ヒュケリオンなのですよね？さすがに学生相手には」

「大丈夫でしょう。仮にもＩＳを学ぶための学園に通う生徒達だ私くらいどうにかできるだろう」

「さすがに将軍と比べるのは酷いかもですよ・・・」

ニケがそういいながら苦笑するが実際この２人は負けるにしてもそれなりに追い詰めることが出来るほどの腕は持っている。それに仮にもＩＳの操縦者を育成する学校の生徒が僕に負けるのもおかしいだろうと思っている。

『まもなく日本に到着したします』

そのアナウンスが流れるといったん話すをやめた。そして飛行機が着陸するなり外の光景を見ると

「・・・・日本のジャーナリストは仕事が速いですね。どこで知られたのでしょうか」

外に日本の報道関係の人たちが多く集まっていた。一応極秘のはずだったのだがどこからか漏れてしまったのかもしれない。そして、外にいる報道陣たちからの声は

『ボルキュス将軍がこられているとは本当なんですか!?』

『先日のクーデターの映像での出来事はすべて本当なのでしょうか』

『ＩＳコアの開発が可能とは本当なのですか!?』

『将軍は、男性だということにたいしての答えを』

っといったような声が聞こえてくるがその報道陣達との間に軍の装甲車と迎えの車が来たので車で壁になった隙に迎えの車に乗り込み移動した。

ところ変わってＩＳ学園の職員室

「本日アメリカから代表候補生がくることになっているがこのことは先日から知っていたであろうが何か質問等ある先生はおられますか」

そこで1年1組の副担任である山田　真耶が質問をした。

「その生徒はどのクラスにはいることになるのでしょうか？」

「その生徒は、1組・・・織村先生のクラスに入ることになっている」

そこで、担任である千冬が

「それはわかりましたが、その生徒の名前をまだ聞いていないのですが」

「・・・われわれにもまだ知らされていないためそれは答えられない」

実際アメリカ政府から送られてきた資料は、簡易的なものばかりで転校生の名前すら書いていなかった。アメリカ政府としてはもともとＩＳ学園にいれる気はなかったためＩＳ委員会が無理やり入れるように催促したためそこを強く言うことができないそれに先日の映像を見てしまっているため下手にアメリカに対して強く発言することすらできない。

「ふむ・・・わかりました」

少し場所を変えてＩＳ学園にいる織村　一夏

一夏は、命の件があってから今まで誇りであり自慢であった姉の千冬との関係がギクシャクしてきていた。初めてこの学校に来た際姉がここで教師をしていることもしらなかった。そして、命のことに関

しても言い合いをした

『なぜ連絡をしなかった!!!』

『連絡を入れても出なかったくせにそれに、何で千冬姉がこんなところにいるんだよ!!』

『そ、それは』

『なんでもっと命の事を見てやらなかったんだよ!!!!』

そこからはただ千冬は黙り自身の拳を握りしめながら下を見たままで無言で一夏の前から消えた。

そんな時にアメリカでのクーデターの報道を見て自分の弟は大丈夫なのかと心配になった。それをすばやく鎮圧したアメリカのボルキュスと呼ばれている将軍が発した声を聞き自身の弟を思い出してしまったがあれに乗っているのが命のはずがないと思った。

「ところで箒?今日って転校生がくるんだよな?」

「ああ。そうらしいな。アメリカの代表候補らしい」

「・・・あのオルコットを同じ代表候補か」

一夏は、イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットっと来週の月曜日に決闘?をすることになっている。

「あんな性格のやつじゃなけりゃいいんだけどなぁ」

「それより一夏午後からはＩＳの実技の授業だぞさっさと更衣室に行

け」

「あぁ。わかったよ・・・」

「（一夏やはりまだ命のことを引きずっているのか・・・）」

箒は、一夏がどれだけ命を大事にしていたかを知っているためまだ気にしていると思ったのであろう。

「さて、着きましたね」

「「はっ!!」」

「案内役の人は誰になっていましたかレト」

「大佐・・・イオ先生がすることになっています」

少しいいにくそうにしながら先生というレト確かにいつも大佐と呼んでいればいいにくいのかもしれない。そしてそれからすぐに

「申し訳ありません。将軍会議が少し長引いてしまい」

「気にしていませんよ。だから早速お願いします」
「はっ！ですが今は午後の授業でＩＳの実技ですけどもそちらにいかれますか？」
「挨拶くらいは出来るでしょう。それでお願いします」

そういうとイオ先生？について行きちょうど授業をしている所だったが僕は、そこで指導している教師を見て僕の視線が冷かなものになっていくのがわかった。

「織村先生。アメリカの代表候補生を連れてきた」
「あぁ。イオ先生わざわざすまないな」

そういうと今まで起動の練習をしていた生徒達を集め紹介をしようとしたがいざこちらに目を向けると千冬は信じられないものでも見たかのような顔になり口をパクパクさせそんな状態の千冬を心配した女性とはどうしたのかといった状態だが一夏は、その視線をたどりなぜこんな状態になってしまったのかを理解した。その視線の先にいた人物は、自分と姉とは違う白い長い髪そして、きれいな紅い瞳で右目に眼帯をつけてアメリカの軍服をきた子供をみた。イオは、その二人のことをお構いなしに自己紹介するように言う
「始めまして。ＩＳ学園の皆さん今日ここに転向してきました。アメリカの代表候補生のボルキュスといいます。よろしくお願いします」

正そういうと女性とたちは

『男の娘キタァァァァァ!!!!!!』

『かわいい!!!!!』

などといったことを好き勝手言っているが一夏が今の挨拶を聞くとどうなっているのかわからなくなり聞いてしまった。

「み、命だよな？」

そういうと周りが急に静かになりそして

「あぁ。お久しぶりですね。一夏お兄ちゃんそして、千冬お姉ちゃんも久しぶりですね」

冷ややかな目のままそう言いやっと千冬が言葉を発するが

「な、なぜ命がアメリカの代表候補生なんだ？」

「それは、言う必要がありますか？」

「え？」

「僕は・・・私はただ代表候補生としてここにきたそれではだめですか？」

「だが、ボルキュスとは・・・アメリカの将軍でありコアの開発ができ」

「ええ。あれは全部私です。現在私は、アメリカで将軍をしています」

そういうと千冬は、力なく膝をついてしまった。

第六話

あの後の千冬は、授業を進められる状態ではなくなったため副担任の真耶が引き続き授業をするが生徒たちはあまり授業に集中せずにボルキュスのことばかりを気にしだした。現在コアを開発できる人物は、失踪中の篠ノ之博士とボルキュスの2人のみだ。彼とお近づきになれれば自分専用のＩＳが手に入るかもしれないと甘い考えをしている。

その中一夏は、自身の弟が自分たちの前にまた現れたと思ったら自分が知っている弟ではなくなってしまっていると感じ千冬とは違った意味で混乱している。そんな一夏を励ますかのように箒は、一夏に声をかけるがその彼女さえも昔の命のことを少なからず知っているが今目の前にいる者が同一人物とは同じだとは思えなかった。昔の彼であれば千冬や一夏に対してこんな冷たい目で見たりしないっと思った。

そんな集中もせずにやっている授業を見学していると

「え～っとボルキュス君でいいのでしょうか？」

真耶が呼び方について質問をしてきた。ボルキュスが千冬と一夏の弟であるということは同じ織村ということになるのでそのために聞いたのであろう。

「ええ。それでかまいませんよ。それでどうかしましたか・・」

「えっ。あっはい。授業を見てどうでしょうか？」

「ふむ・・・・・そうですね」

少し考えたようなそぶりを見せると

「一言で言ってお遊びですね」

「っえ?」

その一言で授業をしていた生徒達全員の動きが止まりその視線をボルキュスに向けた。

「な、なぜそんなふうに言うのですか!?皆さん一生懸命にがんばっているんですよ!!」

真耶がボルキュスにたいしてそう言うが二人の間にイオが割って入った

「山田先生。貴女は、どう思うかの質問をしたのに対して将軍はただ感じたことを言ったただそれだけでなぜそんなに熱くなるんだ」

「で、ですがイオ先生」

真耶がイオに対して何かを言おうとするがそれを割って入るかのように

「納得いきませんわ!!!なぜ急に着たばかりのそんな子供に私たちの授業内容がお遊びなどといわれなくてはならないのですか!!!!!」

生徒達の中から金髪でブルーの瞳をした女性とが抗議してきた。

「それに、先ほどの会話からさっするに貴方織村先生の弟だからと言って少し調子に乗りすぎではありませんか？それにこのＩＳ学園に貴方のような子供がくることこそお遊びにきたのではなくて？」

その女性とがそう言うと近くにいた。レトとニケが前に出て

「・・・・将軍この女解体してもいいですよね？」

ニケがそう言い殺気を出した目でその生徒を睨む

「ニケ・・・それは私が撃ってからにしなさい」

レトは殺気は出してはいないがさっきのボルキュスのような目をした。

「やめろ!!ニケ、レトここは一応は学園なんだぞ！」

「ですが大佐!!!」

「いいから黙っておけ！」

イオが二人を止めるがそのイオも若干怒りをだしている。

「ほぉ・・・では、貴女は私のことをそこまで言うのであれば自信があるのでしょうな」

ボルキュスがそう言うとその女性とは当然と言うふうな態度で

「もちろんですわ!!私セシリア・オルコットは、イギリスの代表候補生にして入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「(確か一夏お兄ちゃんも倒しているはずですがまぁいいでしょう)」

本来ボルキュスも編入試験を受けなければならなかったがＩＳ学園の教師達がそれを拒否したと言う理由で試験は行われてはいなかった。どんな人物がくるのかも知らされていなかったがアメリカのＩＳはバリア無力化攻撃が全機体可能であるという情報だけは知っていたのでそれに情報規制等のせいで一般人にはあのクーデターの時の映像で殺す所だけは報道されてはいないが教師たちはそのことを知っていた。

「ほぉ・・・それはそれは、私はエリートと言われている無能をそれなりに見ましたが貴女もその類なんでしょうな」

「あ、あ、あ、貴方！私を侮辱するつもりですか!!!」

「あぁ。私は、思ったことをただ言ったまでだが気に障ったのなら謝ろうか？」

「っく!!!いいでしょうそこまで言うのでしたら来週そこにいる織村さんと・・貴方のお兄さんと決闘することになっていますし貴方とも戦ってさしあげて私が本当のエリートということを証明してさしあげましょう!!!」

セシリアがそう宣言すると一夏と箒を除く生徒達は盛り上がったようで歓喜の声をあげているが一夏と箒は複雑そうな表情をして真耶はとても顔色が悪くなった。

「ほぉ・・いいでしょう受けますが。私はいくつハンデをつければいいのかな？」

そう言うとセシリアと他の女生徒達は笑い出した。

「それ本気でいってるのｗ」

「さすが織村君の弟だねおんなじこと言ってるよｗ」

「むしろ私がハンデをつけますわ」

そんな中ボルキュスに対して話しかける女性とがいた。

「ねぇ。ボルキュス君今からでも遅くないからハンデつけてもらえばいいよ」

「そうそう、男が女に勝てるわけないんだし」

「ふむでは、私はハンデを何もつけずに戦っていいということでよろしいかな？」

「えぇそうですわね」

そのやり取りを聞いていた真耶がボルキュスに対して

「あ、あのボルキュス君！ハンデをつけてくれませんか!?」

その対応になぜと言った表情をしたセシリアが

「山田先生そんなものは要りませんわ。それに私がこのような子供にまけるわけないです。まったくアメリカはなぜこんな子供を代表候

補にしたのでしょうとても理解になやみますわ」

「つだそうですので山田先生私は、ハンデはいらないらしい。では、今日はこれで失礼させてもらいます」

そう言うとアリーナから出て行きその後をニケとレトがついていったがその後を追いなんとか考え直してもらおうと追いかけようとした真耶をイオが止めた。

「イオ先生なぜ止めるのですか！」

「オルコット自身必要ないといったんだ。ならば将軍がハンデを負うことはないでしょう」

「ですが、貴女ならよく知っているはずですもしもオルコットさんと戦えばほぼ確実にオルコットさんが・・・」

「山田先生そこからは知られては不味いはずですが？・・・それと山田先生」

「・・・なんでしょうか」

「オルコットは少し我が祖国を・・・ボルキュス将軍を馬鹿にしすぎた。あの場では私はあの二人を止めるだけで精一杯だが私もこれ以上は我慢はできないぞ」

その一言で真耶は、自分が先ほどのセシリアの暴言に対して何も対処していなかったのを忘れていた。現在このイオは先生としてここに着たが現役のアメリカ軍のボルキュス大隊所属の大佐であるしボルキュスも将軍という立場の人間であの場でのことを持ってこられ

このＩＳ学園に干渉することさえできる現在のアメリカは、条約を無理に守る必要性がまったくないため攻めてこないという可能性はないわけではない。

「なに、将軍もむやみに殺したりはしなはずだ・・・・たぶんだが」

そう言われとても不安になってしまった真耶だが最後の一言は一夏に少し聞こえていた。

「（殺す？なぜ命がオルコットの事を殺すんだ？ＩＳに乗っていれば殺される事はないんじゃないのか!?・・・命お前はどうして変わっちまったんだ。俺がもっとお前の事をかまってやっていれればこんな風にかわったりしなかったのか？）」

第七話

現在アメリカは、中東の小国であるクリシュナ王国と交渉が行われていた。クリシュナは、小国ではあるが水産業が盛んだそして何よりレアメタルが豊富に採掘されているためとても豊かな国だ。その採掘されるレアメタルの中にボルキュスが造るＩＳのコアに必要な素材があったためアメリカのロキス書記長がクリシュナとそのレアメタルの採掘権についての交渉をしている。

当初は、この交渉に渋っていたクリシュナ外交官だがその外交官を下がらせクリシュナの天才技術士といわれているシギュン・エルステルに代わった。彼女からの条件としては、アメリカの技術提供であった。これはもちろんコアのことだが現在このコアを使ったＩＳは、アメリカ軍全軍に配備されているわけではないためかなりつらい。

現在配備されているのは、開発者であるボルキュス将軍の大隊に１２０機でさらにワシントンにテロ対策などのため３００機配備されて後は近くの基地に２～５機配備されいる程度のためそんな中でコアの提供はきついがクリシュナは、もしもこれが受け入れられない場合は採掘権を渡さないだけではなく輸出もしないと言ってきたそのため仕方なくコアを提供することになった。

現在クリシュナ王国にあるＩＳは、全部で１５機で第二世代ファブニルだけとなってはいるがロキス書記長は、これ以外にも何か隠していると確信を持っていた。

「っく!!あの小娘にしてやられた!!!」

「書記長落ち着いてください」

「・・・・あぁすまない。少し感情的になりすぎた」

「コアを提供することになったのは痛手ですがなんにしろこれで採掘権を得ることができたわけですし今回はこれでよかったということで」

「・・・嫌、今回手に入った鉱山はもともと我等が欲していたとこではなく第三希望の場所だ。はっきり言って今回の交渉はこちらの負けだ」

そう言うとロキスは、苦虫をつぶしたような顔になった。

「何にしてもとりあえずは今回は手にいることができただけでもよかったと思うしかないようですね」

「あぁ。そう言うことにしておくことにしておこう・・・それでバデス主席将軍補佐官新造艦のほうはいつごろ完成する予定なんだ」

「順調に行けば夏までには完成するかと・・・・」

「それにしてもボルキュス将軍には驚かせるばかりだな新造艦の設計図に新型戦車にパワードスーツといった物のを日本にいくまでに残しておいてくれるとは、こちらとしてもありがたいが」

「確かに将軍は、まだ若いですがしっかりとしておられますしそのおかげで我等はまたこうして戦場に立つことができました」

そう言うと二人は、笑みを浮かべ報告書に目を移した。そこに書いてあった物は〝アーセナルギア〟
〝アウターヘイブン〟と命名されている巨大戦艦の報告書であった。

私達は、アメリカとレアメタルの採掘権についての交渉をしにきたけど最初の外交官ではアメリカのロキス書記長に言いくめられそうになったために私が代わった。そして、私はコアの提供を採掘権の譲渡の条件にした。さすがのロキス書記長もまだ全軍に配備が終わっていないコアの提供は渋ったが輸出停止を言うと提供してもらえることになった。

「シギュン様。お疲れ様でした今回の交渉はうまくいきましたね」

「ええ。そうね今回の交渉で私達はだいぶ利益ができましたが向こうはあまり利益がでなかったみたいね」

私は、護衛として一緒に来ていたナルヴィ・ストライズ上等重騎士にそう言った。

「・・・ですが今回私達は、利益を取りすぎましただから」

「何か事件があればアメリカは、こちらにそれを理由に攻めてくると？」

「ええ。間違いなく攻めてくるわ」

ナルヴィは、そんなことないと言うが今回の交渉相手であるあのロキス書記長なら絶対攻めてくるであろうと思った。それにもしも攻めてくるのでは、アメリカには最強のカード持っているこの間のクーデターをすぐに鎮圧したあのボルキュス将軍がいる。彼は、軍や政府にたいしてもかなりの発言力を持っているとも聞く。だがその姿は一度も見たことはない。

「それよりシギュン様先ほど報告がありましたがアメリカ軍のボルキュス将軍が日本のＩＳ学園に編入したという報告が」

その報告を私は聞くと彼に接触して何とかロキス書記長をとめてもらえないかと考えた。まずそのためにも

「・・・ナルヴィすぐにクリシュナに戻って日本のＩＳ学園に私たちも編入する準備をするわよ」

「へ？何言ってるんですかシギュン様！」

「今のうちに何とかボルキュス将軍に接触してロキス書記長を説得してもらう・・・」

「・・・本気ですか」

「ええ。アメリカは、今の調子でなら早くて夏には戦力が整うわ最低でも秋には完璧に・・・・だから時間がないの」

「わかりました」

そう言うと二人は自国に戻るために空港に移動した。

第八話

現在ボルキュスは、第三アリーナのＡピットに来ているそこには他に一夏と箒、イオ、ニケ、レトがいる。でも、一夏達とボルキュス達は話をしないそんなボルキュスの事をちらちらと一夏は見るがそれを完璧に無視してセシリアの専用機である〝ブルー・ティアーズ〟についての情報を見ているがそえは学園側に渡された情報に過ぎないためあまり信用はしないがとりあえずはビット兵器使うという事だけを覚え主力武器であろう遠距離射撃用武装のスターライトｍｋⅢの威力などを参考にはしておいた。

そんな若干気まずい雰囲気の中そこへ山田先生が息を切らしながら走ってきた。

「お、織斑君織斑君織斑君っ」

その声が聞こえてきたほうを一夏と箒は向きボルキュス達は目だけそちらに向けた。

「山田先生、大丈夫ですか？。一度、深呼吸してください」

一夏がそういうと山田先生は、大きく深呼吸を一度すると落ち着いたのか続きを話し始めた。

「お、織斑君来ましたよ！織斑君の専用ＩＳ！早く来てください」

「いくぞ、一夏!!」

どうやら、ようやく来たみたいですね。一夏お兄ちゃんが箒さんと山田先生に引っ張られてつれられていく。その間もこちらをちらちらと見てくるがいいたい事があれば言えばいいのにと思ったがやは

りどうでもいいと思ってしまった。そこへ千冬お姉ちゃんが来て

「・・・どちらが先に出るんだ?織村かみ・・・ボルキュスか」

命と言いそうになった時イオ先生が睨んだことに気づいたのかボルキュスと言い直した。

「では、私から行かせてもらいます」

僕がそう言うと一夏お兄ちゃんと千冬お姉ちゃんが何か言おうとしたがその前にニケとレトが割って入り

「将軍がんばってください!!!」

「私達の国を侮辱した。あの女を倒してください!!!」

レトとニケに声援をもらうと

「わかった。できるだけがんばろう・・・」

そう言うとヒュケリオンを展開してゲートから出た。ゲートからでるや否や観客席は女生徒たちで埋まっている。そして、目の前にはオルコットさんがいた。

「あら?逃げずによく来ましたわね」

セシリアは、ボルキュスを見るなりそう言うがとうの本人はどうで

もいいかのように無視をするが

「では、最後のチャンスをあげますわ」

セシリアは、腰に当てた手でボルキュスを人差し指を突き出した状態で向けて左手に持った銃は余裕なのかまだ砲口が下がったままだ。

「ほぉ・・・チャンスとは何かな？」

「わたくしが貴方のような子供に勝っては一方的な勝利を得るということは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで私に対して言った暴言を謝るというのなら、許してあげないこともなくってよ」

そう言って目を笑みに細めるが

――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティのロック解除を確認。――

「ほぉ。だがそれは、チャンスとは言わないのではないか？それに私はあの時何か私は何か変な事でも言ったかな？」

「そう？残念ですわ。それなら――――」

「そして、このアリーナにいる全員に問いたい貴女達は男性が女性には勝てないと言ったな」

そう言うとあちこちから「何を当たり前のことを」っと言った風な声が聞こえてきた。

「だがそれは、女性にしかＩＳが使えなかったからだ。・・・・だが私は貴女達しか使えないはずのＩＳを使っているこれでも男性は女性

に勝てないと思うかね？」

そう言うとアリーナはざわめきだした。確かにそのとおりだと言う声も聞こえてくる現在自分たち女性にしか使えないとされてきたＩＳだが目の前にいるボルキュスはすでに男でも扱えるＩＳを造りそして織村　一夏はそのＩＳを使ってもいないにもかかわらずＩＳを使用できている。この事からすでに女性が優遇されることはないとそして対等になった。後は、どちらが強いかただそれだけの話だそうなればほぼ男性が勝つことになる軍であればＩＳのせいでやめる事になった者達が戻りまた空を飛ぶそして女性は、必然的にどんどん追い詰められる事になるだろう。ボルキュスの今の言葉で完璧に現実をみてしまった女生徒達だ。

――――警告！敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。――――

「喰らいなさい!!」

そしてセシリアは、キュインッ！と独特な音とビット４機が展開して共に撃たれたビームがボルキュスの元へ駆けるそして、盛大に土煙がたった。

◇

「命!?セシリアの奴いくらなんでもやりすぎだ!!」

一夏は、モニターに写る光景を見て叫んだ。

「オルコットめ子供相手にやりすぎではないか!!!」

箒もさすがにやりすぎだと思い叫ぶがそんな二人とは裏腹に千冬は冷静に

「二人とも静かにしろ」

そう言うがその手は、コブシを握って耐えているかのようだった。

「千冬姉なんでそんなに冷静でいられるんだよ!!また、また命を見捨てるのか!?」

一夏がそう言うと千冬は、歯を食いしばって耐えた。興奮状態の一夏に対しイオが話しかけた。

「織村・・・・どちらも同じだったな。一夏君少し落ち着け「だけど、イオ先生!!!」将軍がこの程度で負けるわけがないだろう」

そう言うと一夏と箒は、少し冷静になったのかイオの声に耳を貸し

「ほら、モニターを見てみなさい」

大量の土煙の中でゆっくりと動く影が見えた。

◇

「な、何ぜ。無傷ですの!?」

ボルキュスのヒュケリオンは、まったくの無傷の状態で現れた。

「何か今したのかね？」

セシリアを挑発するような話方をする。それにたいしてセシリアは頭にきたのか。

「っ～～～～～!?踊りなさい!!わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

そう叫んで４機のビットをもう一度展開しようとするが

「・・・・・遅すぎるのだよ」

セシリアのビットが展開されると同時にまだ少し舞っていた砂煙の中から赤いビームが放たれた。

「な、何なんですの!?」

「油断しすぎだよ。あれだけの土煙をあげたのだその間に何か仕掛けられていてもおかしいとは思わなかったのか？」

完全に煙が晴れるとそこにはまるで牙のような形をしたセシリアのビットとはまた違った形のビットが４機展開していた。

「な、なんですの!?ビット兵器を使っているのイギリスだけのはずですわ!!」

「いつからビット兵器は、イギリスだけのものになったのですか。ア

メリカでもすでに開発されていますよ」

そう言うとボルキュスはビットをマントの中にしまった。

「・・・何のつもりですの」

「いや、この兵器はなかなかにつまらないからね。これからは使わないで戦ってあげよう」

「っ～～～～!?後悔してもしりませんわよ!!!!」

そう言うと主力武器である銃を連射してくるがそれをボルキュスは最低限の動きで避けセシリアの近くまで進んで行く。そんなボルキュスの対応にセシリアは徐々にあせりだしてきた。

「(なぜ当たりませんの!!)」

先ほどから何発も撃っているがそれは当たるどころかかすることすらせずに避けられどんどん近づかれる。それは次第にあせりから恐怖に変わっていく。

「い、嫌こないで。こっちにこないで!!!!!!!!」

セシリアは、虎の子の2機である『弾道型』を撃つがそれをヒュケリオンのスコルピオンテールで破壊されスターライトでもう一度撃とうとして構えるが構えた瞬間に目前まで迫っていたヒュケーリオンによって剣で破壊された。

セシリアは、最後の武器である接近戦用のショートブレードのインターセプターを出すがセシリアは目の前にいるボルキュスが死神にしか見えなくなっていた。すでに戦闘意思はないのは明らかであるがまだ彼女は武器を落としていないそしてこれは、模擬戦ではなく〝決闘〟だ。

「た、たす・助けてください・・助けてください」

セシリアはただボルキュスにそう言うが

「だがこれは決闘なのだろう?決闘とは本来どちらかが力尽きるまで続けるものだ・・・そうだろう?イギリス代表候補生セシリア・オルコット」

その顔は、恐怖と絶望に染まっていく。

ボルキュスがそう言うとそこへ2人の乱入者が現れた。

「はぁぁぁぁぁぁ!!!」

それは、日本の第二世代機打鉄に乗った千冬とさっき届いたばかりの白式に乗った一夏であった。二人はヒュケーリオンに切りかかるが千冬の一撃は避け一夏の攻撃は、スコルピオンテールで受け止めた。

「何のおつもりかな?織村先生・・・」

「・・・・オルコットはすでに戦闘続行は不可能だ。これ以上の戦闘はみめるわけにいかない」

「命どうしちまったんだ!?ここまでする必要なんてないだろう!?」

千冬は、ボルキュスに・・・・命に剣を向けることをためらっている。一夏はなぜここまでするのか信じられないといった感じだが

「それは、簡単なことですよ。オルコットさんは私に模擬戦ではなく〝決闘〟を申し込んできた。ただそれだけですよ・・・それにまだオルコットさんは武器を持っているなら戦闘続行の意思があるということでしょう。違いますか?」

「だが、それでもこれ以上の戦闘は認められない!」

「・・・・・・・・・」

なぜお姉ちゃんは、僕に剣を向けるのかわからない。

「セシリアは、もう戦えないけど。俺が相手をしてやるよ命!!!」

「なっ!!一夏止まれ!!!」

何を思ったのか一夏がヒュケリオンに向かって突っ込んできたがそれをボルキュスは綺麗に避けそして、スルピオンテールをうまく使

い一夏を傷つけないようにアゴをかすめた。そして、そのせいで一夏は軽い脳震盪を起こして気を失った。

「・・・・・命なぜお前はそうなったんだ？昔のお前はどうしたんだ？」

千冬が、急に話しかけてきた。

「・・・・・・・」

「私のせいでお前は変わってしまったのか？それなら謝るだから昔の命に戻ってくれ・・・・」

「・・・・何をいまさら言うのですか？僕の事を捨ててておいて？」

ボルキュスがそう言うと千冬は、驚いた様な顔をして

「ち、違う私は、お前を捨ててなどいない!!」

「言葉ではどうとでも言えます。私が・・・・僕が右目を無くしたときも一度も来てくれなかったくせにいまさら何を言うんだ!!!!!!!!」

「僕がどんなにがんばったとしてもいつも一夏お兄ちゃんしか見て僕の事は見てくれもしなかったくせに!!!!!!!!!!今更何のつもりだ!!!!!!!!」

僕はそう叫ぶと両肩のスコルピオンテールで千冬お姉ちゃんを攻撃した。それを避けようとする千冬だがその避ける先を読みそこへショットガンを撃ちこんだ。それは、ほぼ全部当たりシールドにより

弾こそは当たってはいないが衝撃はすべて通っている。千冬は倒れるような形になったがそれを剣を地面に突き刺す形で支えた。

そして

「確かにそうだった。お前の事をちゃんと見てやれなかった。今更謝っても遅いという事はわかっているが・・・・すまない。許してくれとは言わないがせめて一夏とだけでも昔みたいに接してくれないか私のことを怨んでもいいだから。頼む・・・・」

そう言うと一夏同様に気を失ってしまった。自分はなぜこんな事をしたのだろう。本当は、こんな事をしたかったわけじゃない。ただ自身の姉のためにがんばっていただけのはずがなぜこうなったのだろう。そんな考えをしているとイオと山田先生がやってくる。

「・・・ボルキュス将軍。今回はこれくらいでやめておかれたほうがよろしいかとこれ以上続けらるのはさすがに」

「あぁ。さすがに今回はやりすましたね・・・・」

僕は、そう言うとさっきの千冬お姉ちゃんの言った事を思い出した。なぜ今更になて謝るのだろうか僕は、謝ってほしかったわけではない。なのになのに・・・

「あ、すみません。イオ先生オルコットさん達を医務室に運ぶのを手伝ってもらえますか?」

「山田先生。オルコットさんは私が運びましょう。一応は私の責任ですから」

「えっ。あ、じゃあお願いしますね。ボルキュス君」

ボルキュスは、いつの間に気絶していたのかわからないセシリアをいわゆるお姫様抱っこという形で運んだ。その後は、今までは学園の外にあるホテルから登校していたが部屋の準備ができたため学生寮に移れることになったという山田先生からの連絡を受けて荷物はすでに運ばれていたのでそのまま寮に戻った。

「・・・・・・ふぅ～」

ボルキュスは、窓の外を眺めながらつぶやきそして先日行われたアメリカでのクリシュナでのレアメタル採掘権についての交渉の報告書を読んだ。結果だとこちらが完璧に負けたという感じだと思いそして、ロキス書記長は絶対にクリシュナに対して近い未来に軍事行動を起こすであろうと予測をしさらにレトのおかげでデータがそろってきていたエルテーミスの起動データと戦闘データから新しい機体の開発案を練っていた。

「・・・・これからこの世界はどう変わっていくのでしょうね」

ただそうつぶやいたボルキュスの顔は、とても綺麗で、無垢で、とても残酷な笑みを浮かべていた。

第九話

あの後一夏と千冬はというと真耶とイオによって医務室まで運ばれた。その後は、時期に目が覚めると言うことだったため二人はその部屋を退室してから数時間が経ち医務室にある窓からは月明かりが照らしだされるころにやっと千冬は目を覚まし自分が今医務室のベットの上にいることを理解した。今日の出来事を思い返していくそして今日の戦闘で命が言った言葉を思い出しゆっくり思い出していく

『・・・・何をいまさら言うのですか?僕の事を捨てておいて?』

『言葉ではどうとでも言えます。私が・・・・僕が右目を無くしたときも一度も来てくれなかったくせにいまさら何を言うんだ!!!!!!』

『僕がどんなにがんばったとしてもいつも一夏お兄ちゃんしか見て僕の事は見てくれもしなかったくせに!!!!!!今更何のつもりだ!!!!!!』

「(あの時私は、何も言い返せなかった。いや、言い返せるわけもなかったあの子にとってそばにいてほしいときに私は何もしてやることができなかった。・・・・それどころか私は、オルコットを助けるためと言え命に刀で切りかかってしまった。)」

再度今までの事と今日の自分がした行動を後悔したがそれはもうすで気づくのが遅すぎた。だが私は

「・・・・・一夏起きているか?」

隣で寝ているはずの一夏に声をかけた。

「・・・・起きてるよ。千冬姉」

「私は、どこで間違ってしまったんだろうな・・・」

私はただ力なくもう一人の弟に聞く。

「いや。千冬姉だけのせいじゃない・・・・俺も間違ってたんだ」

「そうか・・・・。私は命が賢い子だからといってそれに甘え命のことをまったく見ていなかった。心のどこかで命なら大丈夫だと思ってしまっていたんだろうな」

「俺もそう思ってた。いつも命は、いろんなことをがんばって結果を残してた・・・俺なんかよりずっとがんばってたのに俺はそれが無理をしてたことだって気づいてやれなかった」

一夏がそう言いさらに言葉を続けた。

「あのさ千冬姉」

「・・・なんだ一夏」

「俺さ。命がアメリカに行くとき見送りに行ったんだけどさその時命に〝いつでも帰って来い〟って言ったんだけどさ命はただ俺にただ

〝バイバイ〟ってだけ言われたんだ。その時初めて弾の前でみっともなく大泣きしちまったんだ・・・・」

「すまなかったな一夏・・・・命にも言ったが今更言っても遅い。私のことを怨んでくれてもいい。私は、今までちゃんとしていたつもりで実際はただお前達に辛い思いをさせていただけだった」

一夏は、千冬がそういうと自身にかかっていた毛布を深くかぶり

「・・・千冬姉がどれだけ俺たちの事を育てるためにがんばってたのかは知ってるつもりだから。俺は怨みも憎んだりもしな。だけどさぁ、せめてあの時は命のそばにいてやってほしかった」

病室の中にかすかにすすり泣く声がしたが千冬は、それを聞こえていないフリをして

「今まで本当にすまなかった」

そう言い。目を閉じるとその瞳から涙が頬を伝っていった。

◇

場所が変わりそこはＩＳ学園の寮の一室の浴室で。サァァァァァ・・・・・。

シャワーノズルからの熱めのお湯が噴出し水滴は肌に当たって弾け、またボディーラインをなぞるように流れていく。白人にしては珍しく均整の取れた体とそこから生まれる流線美はちょっとしたセシリアの自慢だ。しゅっと伸びた脚は艶かしくもスタイリッシュでそこいらのアイドルには引けをとらないどこか勝っているくらいであ

る。

胸は同じ年の白人女子に比べると幾分か慎ましやかではあるが、それが全身のシルエットラインを整えている要因でもあるので本人としては複雑な心境だという。しかしそれも白人女子と限定すればの話であって、日本人女子と比較すれば充分どころか大きいくらいだ。

その胸にシャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。あの後わたくしが目を覚めると医務室のベットで誰がここまで運んできてくらたのかと山田先生に聞くとあのボルキュスさんだと言うこと

（今日の試合、いえあれを試合と言えるものではありませんでしたわね。あれは一方的な暴力――――――）

わたくしは、無様と言っていい様な命乞いまでもしたがその時の彼の声は私の事を恐怖で染めようとしていた同時にどこか悲しさと狂気のような雰囲気があった気がしたがそれは、たまたまそう思ってしまっただけなのかもしれない。

彼の戦い方はまる子供がアリの手足を楽しむかのように1本1本引き抜いていくかのような感じがした。そこまで自分と彼との間には圧倒的な実力差があった。

ボルキュス・・・・アメリカの将軍であり男性でも使えるＩＳコアを造った人ＩＳに乗っている女性からは恐怖の象徴とされている人物だったがいざ見てみたらそれはまだ幼い少年だった。右目には眼帯をしていたがなぜしているのかは分からない。そのせいもあって自分がその見た目だけを見てあの子供は対したことはないと思い込んでしまった。

その結果が無様な命乞いまでしそのみに恐怖を刻み込まれた。彼のこと考えると体が震えだしその体を抱きかかえるかのようにすると今まで自分がしたことを思い出しさらに震えが増した。

「(彼は、アメリカの英雄で現在の将軍だ。そんな人物に対して私は、あそのようなことをしてしまった・・・)」

その結果で自分に対して本国がだまっているとは思えない。今彼・・・いやアメリカとの関係を悪くなってしまえば取り返しのつかないことになってしまうであろうとそして今後自分にくる罰のことを考えると最低でも

代表候補生の除名であると考えつく

「わ、わたくしは、・・いや、そんなの嫌」

私はそう考えまた強く体を抱きかかえながらシャワールームの中で膝を付き泣いた。

◇

アメリカのとある一室にてＩＳ学園行われたボルキュスとセシリアオルコットによる決闘の映像を見ていた。

人数は、１０人ほどの男性でそのうちの一人はイギリスの大使であるがその顔色は真っ青であるそれにたいしてその他の男性その中でも一人の青年はとても顔色がよく楽しそうな顔をしている。

『い、嫌こないで。こっちにこないで!!!!!』

『た、たす・助けてください・・助けてください』

セシリアオルコットがそう言うと青年を筆頭に笑い声があがった。

「さっきまでの伊勢はどこにいったのでしょうね」

その間も大使の顔色はどんどん悪くなっていくが初老の男性が声をはっし

「・・・さて、今回のこの件に関してどう対応したものかな」

ビクっと反応し、ついにきたかと身構えた。

「私としては、今回はとくに彼女とイギリスにはペナルティーはなくてもいいと思いますよ」

青年がそう言い

「ふむ。君がそういうのであればそうしよう」

「そういうわけで〝大使〟殿今回はこれでおかえりいただいて結構ですよ」

大使は、頭を床にこすりつけるかのように土下座をするとこれ以上青年の機嫌を即なわないうちにいそいそと部屋から出て行った。

「さてみなさん、この愉快な茶番劇の映像はここまでにしましょうか」

青年の一声でその部屋は静かになった。

「ところで〝アズラエル〟よ。近々ＩＳ学園で行われるクラス代表選

を見にいくとのことだが君がわざわざ出向くこともないのでは？」

「いやいや。私はＩＳ学園には私の友人に会いにいくだけですよみなさん」

「はぁ・・・・そういうことか」

呆れたかのようなため息がでると

「他には何かありますかな？」

「「「・・・・・・」」」」

「特にないようですね」

そうアズラエルがいうと

「青き清浄なる世界のために」

『青き清浄なる世界のために』

そう復唱すると彼ら〝ブルーコスモス〟と呼ばれる者達による集まりは解散となった。

設定

ブルーコスモス

この小説では、原作の反コーディネイターとは違い。

表向きは自然保護団体であるが裏では反女性つまり男尊女卑の至高の持ち主である経済界のトップたちにようる集まりである。

第十話

翌日、朝のＳＨＲ。あり得ないことが起きていた。
「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」
山田先生は嬉々として喋っているがクラスの女子は盛り上がることはなかった。
「あ、あれ？皆さんどうしたんですか？」
昨日までと比べ明らかに元気がない女生徒達に真耶はとても不思議に思ったが、その原因については彼女自身もわかっているためにあまり触れなかった。
「先生、質問です」
クラスの女子の一人が挙手をした。
「えっとどうしましたか？」
「え～っとこんな事言うのも何なんですけどボルキュス君が代表じゃないんですか？」
やはりボルキュスのことだがそれもそうだろう現在最強の称号をもっている〝ブリュンヒルデ〟である千冬を倒しさらに専用機２機を連続で倒した人物だ。そして、自分たちに今この世界の現実を見せた千冬が負けた事はすでに学園中に知れわたってしまいあのボルキュスが言った言葉もすでに知れわたっている。そんな人物ではなく言い方を悪く言うと出てきて速攻で負けてしまった一夏では、頼りなかったのであろう。
「え、え～っとボルキュス君の事なのですが彼は元々クラス代表を賭けての戦いだった事も知らないようでしたし。それに彼自身からも『私は、辞退させてもらいます』っと言われていますので」
そう言うと女生徒は、納得したのか椅子に座った。そして、一夏もなぜ自分なのかについての質問のために挙手した。
「はい、織村くん」
「俺は、昨日負けたんですけどといよりはそもそも試合をしていないんですけど」

「えっとそれについては――――――」
「私も辞退したからですわ・・・・」
　セシリアも昨日の戦闘で思う事があったのか以前と比べとても大人しかったっと一夏は思った。そしてそんな少し重い空気の中真耶が思い出したかのように
「あ、後織村君「なんですか?」ボルキュス君から一夏君に辞退した理由なんですけど『・・・弱すぎます。せめて経験をつむために代表になってください』だ、そうです」
　その事をいい終わると一夏は、ボルキュスに弱すぎると言われたことで机に倒れこむような形になっていた。
「あ、でも確かセシリアのＩＳランクがＡって言ってたしやっぱりセシリアにやってもらおうよ」
　女子の一人がそう言うが昨日のことを思い出しランクがたとえＡでもあれだったので意味がないのではと思うものも何人かいた。そこへ教室の扉があき出席簿を持った千冬がちょうどよく入ってくると
「お前たちのランクなどゴミでしかない。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階でだれがマシだの優劣をつけようとするな」
　そう言うと今まで静観していた一人の生徒・・・・ニケが千冬に対して言葉をはっした。
「へぇ～。なら織村先生は、将軍は別としてそれは私にも言ってるんですか・・・・」
「・・・ああ。その通りだ。何か問題でもあるのか」
「いいえ～ただ織村先生って強いのかなって思っただけで～す」
　ニケが千冬にたいし少し挑発するかのような声で言うがその目は本気だった。それにたいし千冬は
「ニケつまり私の実力を見たいということでいいのか・・・・」
「はい。そうです」
　そう言うと教室がざわめきだした。いくら千冬が昨日ボルキュス

に負けたからと言ってこれははっきり言って普通なら無謀なことだ。
「・・・わかった。次の授業の時に相手をしてやろう。それよりも肝心なボルキュスはどうした？」
そう言われ今までニケを抜かす全員が気になっていた事を千冬が聞くとニケが少し不機嫌になりながら
「将軍だったら近くのアメリカ軍基地に行ってます・・・・」
「（米軍基地？なぜだ？）なぜ授業にでずに基地に行ってるんだ特にそう行った連絡は聞かされていないが」
それに対して真耶がおずおずと手をあげ
「あ、あのすみません織村先生。今朝早くにイオ先生から今日はアメリカ軍のセグント将軍から基地に出頭するように言われたのでボルキュス君はそちらに行く事になったと言う事を言い忘れてました。」

そこであきれるかのように眉間に手を当てながら
「ニケ。なぜ出頭したのかの理由を詳しくは言えるか？」
一度ニケは考えるがまぁいいかと思ったのか
「基地にラドゥンが配備されたからそれの訓練のために出頭するらしいです」
そういい終わると周りの生徒達はざわめきだした。現在量産されているＩＳの中ではもっとも性能がいい量産機とされているＩＳのため使ってみたいと思う生徒達だった。
「あ、あのニケさん少し聞いてもいいですか？「なんですか？」そのラドゥンってこのＩＳ学園には配備してもらえないでしょうか？」
そう言うなり周りの生徒達は、目を輝かせるが
「無理ですよ」
ニケはただ即答してそう答えた。その答えで明らかに残念がる生徒達。
「そこをどうにかなりませんか？今後の皆さんの授業のためにも・・・」
真耶は、教師として性能がいいものを使わせてあげたいと思うのだ

が普通であれはそのような交渉はニケに対して行うものではなく上の者に掛け合うべき事である。

「山田先生・・・そもそもそう言う交渉とかは私じゃなくてイオｔ・・先生か将軍に言ってくださいよ私の階級はまだ少佐なんですからそこまで発言力ないです」

そう言われ真耶は、うなだれたが真耶はイオとボルキュスのことが苦手だったりした。イオは、雰囲気が怖いと感じてしまいボルキュスに関しては単純に恐怖だ。真耶のことを見ているうちにニケがなにやら思いついたのか

「あ、じゃぁ～もしも私が織斑先生に負けたらこの事将軍に掛け合ってみますよ」

そう言い真耶の表情が明るくなるが

「それでもしもお前が勝った場合はどうするつもりなんだ？」

そこへ一夏がなんとなく聞いてみた。ニケはとても残酷な表情を浮かべながら

「私が勝ったら・・・・・将軍との縁を切ってもらえませんか？ついでに将軍をミコトって呼ばないでもらえますか」

「なっ!?」

それに対して一夏と千冬が驚きの表情をした。

「あんまり将軍の事当然のようにミコトとか呼ばないでくれます？いつもいつも聞いててはらたつんですよね。自分で捨てたくせに有名になったら急に話かけるとか・・・・ホントムカツクんですよね」

それ対しての返答を聞くためか回りは静かになった。

「・・・・わかった。それを受けよう」

!?。千冬姉!!」

「いいんだ一夏。・・・・私が勝ったら一夏が命と呼ぶ事は認めてもらおう」

その返答として

「はいはい。わかりましたよ・・・・・」

ただ適当に返答した。

そのころボルキュスはと言うと。

『はぁ!!!!』

「・・・焦って攻めてくるな。つねに冷静に行動しろそうしなければ無様に死ぬだけだ」

そう言いながらボルキュスもラドゥンを使い格闘戦訓練をしておりその反対側ではレトによる射撃訓練が行われていた。彼らは教室で今どんな事が行われているかはまったく知るよしもなかった。

ちなみにイオはというと

「・・・書類の数が多すぎるな」

本来の軍人としての書類とＩＳ学園の書類の整理をしていた。もしもイオが教室にいれば何とかなったのかもしれないが今は書類の山を片付けていた。

第十一話

「さぁ～って始めましょうか・・・・織斑先生？」

「・・・・ああ」

本来授業時間なのだが今は、千冬とニケによる模擬戦が始まろうとしていた。他の生徒達は、アリーナの席に座ったまま観戦している。現役の軍人とブリュンヒルデとの戦いを生で見ることができるためとても楽しみなのであろう。

「まさか先生のことだから少しでも性能がいいラファールを使うと思ったんだけど打鉄でしかも近接格闘戦用装備しか使わないって・・・・私なめられてます？」

「なめてなどいないさ・・・・これが私には一番あっているのでな」

その対応にニケは、若干イラつきを感じ

「まぁ～どうでもいいけど。私が勝つだけだしね」

そう言うなりニケはギラトスを起動した。

「・・・・あまり調子にのるなよ小娘が」

千冬は、静かにそう言いそして

『模擬戦始めてください!!』

真耶の開始の合図とともに千冬は一気にニケとの間合いをつめ切りかかろうとするがそれに対してニケは

「甘いよ!!!」

腕をあげ中に内臓しているマシンガンで迎撃する。それを上手く回避するがニケの追撃はとまらずに連射した。

「・・・・・」

千冬はそれを回避し続ける。それを続けていくと

「ウロチョロウロチョロとうっとうしい!!いい加減に当たれ!!!!」

少しずつ冷静さをなくしていくそれがさらに数分続き

カチカチ

「っち！弾切れ!!」

「バカスカと撃ちすぎだ。馬鹿者が・・・」

そう言い今まで回避に徹してした千冬がニケの方へ向きなおし唯一の装備である刀を構え切りかかるが

「ならこれでどう!!」

ニケがそう叫ぶとその腕からグレネードが発射した。

「なっ!!まだ弾があったのか!!」

防御の構えをとるがその弾は命中し爆発した。

「あ~あ。軍人の言葉を勝手に信じるからこうなるのよ・・・・」

軍人のニケがいくら弾が尽きたといったとしても普通であれば信じる前に疑うべきだ。これで千冬は負けただろうとニケは勝手に思ったが

「私もなめられたものだな!!!!!」

煙の中から千冬が出てくると防御が間に合わずまともにその斬激をまともにくらってしまった。

「っく!!!!!」

そこからは千冬の連続攻撃が行われるが最初の一撃以外は的確に防ぐニケだが

「・・してやる。・ろしてやる」

「ん?なんといっているんだ」

「殺してやる!!!よくも私の機体に傷をつけたな!!!!!」

今までのニケとは明らかに雰囲気が一変したため一度距離をとろうとした千冬だが

「逃がすか!!!!!」

ニケはそれを許さず両腕で挟みこんだ。そしてその際普段は両腕についている刃は収納しているがそれを出しそのまま挟んだ。

「なっ!!」

「・・・やぁ~っと捕まえた」

そう告げるニケの目は狂喜したような感じをしている。だが千冬は、それよりもシールドがきちんと働いていないことに気づいていた。
「どうしてシールドがきちんと作動しないんだ!!!」
「それはね?この武器がシールド無効化機能を付いてるからですよ〜」
そう言いながら挟んでいる両腕にさらに力を加えると
「ぐっ!!!!」
ギシギシと打鉄のフレームが軋む音が響く。そして刃がある部分はすでにヒビが入り始めている。
「あはははは!!!すごいですね〜あの反逆した女達はすぐに悲鳴をあげたり命乞いしたのに織斑先生はまだもつんですね〜」
パキパキとあちこちにヒビが入りこれ以上続ければ確実にフレームは破壊されてしまうと千冬は考えていた。さらに刃の部分で切断されるのではとだが千冬は、こんな状態でも対応した。ニケに対して蹴りをくわえるとそのせいで腕の力緩みその間に脱出した。
「はぁはぁはぁはぁ・・・・・」
だがすでに千冬は息があがり打鉄はボロボロでさらに一部フレームが完璧壊れているところさえもあった。だが、それでも刀はニケに向けられた状態のままだそれにはさすがのニケでもすごいと思ったのか。
「へぇ。そんな状態なのにまだ私と戦うつもりなんですか」
「はぁはぁ・・当たり前だ馬鹿者」
「何でそこまでがんばれるんですか?」
「・・私は、どんなに恨まれてもいいだがな。これ以上命との・・・・家族の繋がりを切りたくないんだよ」
「・・・・勝手な考えですね」
「ああ、私の身勝手な考えだ。私のせいで命は傷ついたというのにな」
「そう。そこまで判っててても勝気なんですね・・・・なら徹底的に潰してやる!!!」
そう言うとニケはもう一度挟みこもうとし千冬は刀を構えるとそ

こへ

「ニケそこまででやめておけ」

「大佐!?」

イオがトロイアを纏いニケをクロスサイフォスでその動きを止めていた。

「これ以上続けるというのであれば私が相手をする」

そう告げるとニケは

「・・・・判りました大佐の言うとおりにします」

ギラトスをそのまま待機状態にした。

「織斑先生。ニケが迷惑かけてしまいすまなかった。」

「・・・いや。特に気にしてはいないさイオ先生。ニケは、軍人としては当たり前の行動をとっただけだろう」

「・・・・・」

イオはそのことに何も反応をしめさないまま

「では、ニケこの件に関しての反省文を今から書いてもらおう」

「な、何でですか大佐!?」

「今のお前は軍人ではなくただの一般性とだ理由がどうあれ教員との死闘を見逃せない」

そう言うとそのニケの首根っこを掴みずるずると引きずってアリーナを出て行く。